



自然美賛歌

上野 四郎



「宇土半島を小鳥天国に」私たち松橋ロータリー・クラブはこう叫び、関係市町村、各議会に訴え、県議会に陳情して宇土半島を休猟区にしていただいて十年近くなる。

今、宇土半島を行くと、海に山に里に小鳥が群れをなして行く人の目を楽しませる。宇土市街地に住みながら、ヒヨドリ、ウグイスの声をさます喜びは筆舌では表現ができない。

私はこの自然美にうたれて拙著「椿説四郎時貞」の中で、「内藤ジョアン」に四書五経を持たせ、廻江久兵衛の娘が操る孤舟に乗せ、宇土半島沿いに天草を訪れさせ、遂に「ゼロニモ」こと四郎時貞の母「マルタ」を誕生させてしまった。

天草の西海岸はきれいだ。殊に夕風に吹かれては「江蘇省より秋風ぞ吹く」と晶子をして歌わせ、夕映えに輝く海波を見ては、鉄幹ならずとも「紫の波」には感嘆の声をあげたくなる。「自然美は車の数に反比例する」なんて野暮な理屈は抜きにして西天草の海岸の美しさに魅せられた私は四郎時貞を原城で殺すにしのびず、夕陽に映える高浜の海岸から最後の奇跡を演

じさせて南蛮船に乗せ、ルソン島へ送り出してしまった。

昨秋三十三年ぶりに五家荘を訪れた。美しい自然林の紅葉まで人工の道路のために色あせて感ぜられたのは私の僻目であろうか。

車を降りてとことと歩く。ここには三十年昔の五家荘の自然はなく、「いらっしやいませ」と掌を八の字について三方に「むしとうもろこし」をのせ、ごちそうしてくれた「五家荘美人」の姿はもう見られなかった。

樺木の渓流の岸に立った。瀬をはやみ、巖に吼えて岸を嘯む清流は、三十年前の清流そのままであった。そうだがこの清流こそ昔ながらの五家荘の自然美の根源だ。自然は次第次第に減り始めている。近代化というものは、必要ではあるが、やはり何か胸につかえるものがある。あの芋煮とけ坂、ひなみ坂もメルヘンの内の存在となりおおせるのだろうか。

私は、樺木村から官有林を東南に向かって宮崎県境めざして歩いた。自然林を求めてさ迷う山林のあちこちから清流が湧き出して、そのほとりには、天然のワサビが自生している。

山グミが、山ブドウが、山栗が、椎の実が、いたどりが、たらの木が、山芋が、山百合が、くずの根が、あけびの実が、ありとあらゆる山菜が、自然食が山には満ち満ちている。

宮崎県境の自然林の秘境を歩く。山鳥が、バタバタと飛び立つ。狐狸が、うさんくさい動物だといわんばかりの顔をして私を見る。

「ヒューン、ヒューン」妻恋に鳴く雄鹿のいたいたしい鳴耳は詩情を催す。この山奥には草鳥頭のとれる。とりかぶと」が花咲くと聞く。

日本に初めて南蛮外科を導入した宇土栗崎村出身の栗崎道喜の三男天才児道保は立身を欲せず名利を追わず食禄を却け、幽崖窮谷を廻って民病を救ったが、その天命を知るや山林で人知れず死んだと伝えている。

私は毒草であり薬草である「とりかぶと」の紫の花が咲くこの五家荘の自然林で自然科学者道保は自然に融和して還元してその身を消失したと拙作「幽谷の聖者」に結びをつけた。

(医師・随筆家)

同 窓 会

村 崎 圭 子



戦後三十六年も経ってみると、戦後派戦中派という言葉も一頃のように聞かれなくなっただけで、私は自分を戦中派だと思っている。柔軟な脳みそに刻みこまれた「大東亜戦争」という表現は、かたくなに「太平洋戦争」という語句の存在を締めだし続けていたのだ、私は大東亜戦争と言っては子どもたちに笑われたものである。

教育勅語を暗記し、難解な語句も文字もそのままに帳面に清書を繰りかえした。朝登校するといよいよに表記しそれをそらんじる事が朝の日課であった。戦争が激しくなり「七つボタンは桜を鑑」の歌一色の頃は、女でも戦地にいける従軍看護婦に憧れた。純心で幼かった日、国策に沿って「洗脳」されていた私たちは、一途に「お国のために」と生きた健気な少女であった。防空壕掘り、麦刈り、田植え、稲刈りと勉強できなかった私たちは戦後むさぼるように活字を読み、英語の勉強に意欲的に取りくんた。今その時代を強く批判はしながらも、いとおしく懐かしく想い出す。現在のような豪華な卒業アルバムもない。一枚一枚のバラバラの写真が色あせて私たちの学生時代

の可愛い顔を残してくれているのである。しかし、今の学生に比べて、私たちの学生時代は不幸であったと考えた事はない。時間もなく物もない（ノート、鉛筆もなかった）時代であったのに、今ふりかえると懐かしさに溢れ、精一杯に生きた健気な自分たちの青春に喝采をおくりたい想いになるのは、五十路にさしかかった故の感傷であるのかもしれない。

正月三日「殿二会」という名称で同窓会がもたれた。夫々に五十路を迎えた同級生の集いである。殿という字句に多少抵抗は感じられるけれどしんがりという意味を意図した発想であれば、私たちの年代にふさわしく、一でなく二であるところにも肩ひじはらなび優しさもにじみ出ているように思える。旧制高等女学校のしんがり旧制中学校のしんがりの卒業をとりとめて、学制改革による新制高校第二回卒業生であるといふことの二である。三十数年ぶりに相まみえた往年の少年少女たち。恰幅（かっぶく）のいい〇〇氏があの細身の美少年だった〇〇君。〇〇女史が、かつてくりくりした瞳の少女〇〇さん。年を忘れ昔にかえり話題は

つきない。御出席下さった恩師のお言葉にもあったように、先生も生徒ももう年齢の差はなくなって外見は変わらなないように見える。「君たちも五十才か」「あの頃先生は三十代だったのですね」もうずっとずっと昔本人がすっかり忘れていた事件を級友がしっかり覚えていて話はずむ。名残りつきないほんとうに楽しい集いであった。

夫々の場で夫々にたくましく社会に貢献し推進力となって活躍している同級生に接し力強い息吹きを感じるのだった。人生五十年といったのは昔。今は人生百年です丁度折り返し地点です。と言われた言葉も印象に残る。「人生」今まで生きてきた人生。これからどう生きていくべきか。もう一度しっかり考えなくてはならない。忙殺されて過ぎていく中であって「自分」を取り戻して、残されている人生を大事に生きていきたいと思うのであった。ぼやぼやしていられない目を見開いてこれからの人生を充実したものにしなくては。生き生きとした同級生の姿勢に励まされ「若さ」を全身に浴びて家路についたのであった。

(主婦・詩人)